

# くらし：家庭

## 少女マンガと ジェンダー

中川 裕美 ②

る。

意味深いセリフ

池田がオスカルを通して、読者である少女に対して繰り返し訴えていることがある。それは「人間の自由とは何か」ということである。フランス衛兵隊の立場を捨て、民衆の側についていたシーンでもオスカルは部下に対して言う。

「どんな人間でも人間であるかぎり だれの奴隷にも所有物にもならない心の自由をもっている(中略)自由であるべ

きは 心のみにあらず!!

人間はその指先一本 髪の毛一本にいたるまで すべて神の下に平等であり 自由であるべきなのだ」

東京教育大学(現・筑波大学)の学生として、学生運動に参加した経験もある池田によるこのセリフは意味深い。

男装して戦いに生涯を捧げたオスカルという人物造形を、ジェンダーの視点から考えるのも興味深いテーマであるが、ここではもう一つの問題について考えたい。それは

『ベルサイユのばら』における「主題」と「読者」のジェンダー性について

である。

すでに述べた通り、この作品はフランス革命を題材とし、多くの歴史上の人物を登場させている。池田によれば連載当時、編集部は決してこの作品の主題に賛成したわけではなかったという。むしろ「大反対」をされ、「頭を下げ頼みこんで」連載の許可を得たほどであった(池田理代子、1994、「文化としての漫画と歴史」)。

まさに「革命」と

現在の少女マンガを見渡せば、よみがふみの『大奥』をはじめとし、歴史を主題とした作品は数多い。だが

## 歴史を描くという『革命』

『ベルサイユのばら』を はじめと グッズの販 売がされる など、根強 いファンが 多い、70年代を代表する 少女マンガ作品の一つで ある。

フランス革命を題材としたこの作品は、実在の人物であるマリー・アントワネット(写真左)とフォン・フェルゼン、池田が創作したオスカル・ランソワ(写真右)の3人が主役となっている。中でもオスカルは「男装の麗人」としてフランス衛兵隊の隊長を務め、中盤からは物語の中心となって人気を集めることとなる。彼女は「王家をお守りし 軍を指揮する將軍の家」に女の子として生まれながら、父親の思いつきで男として育てられ、剣や銃を持ち、生涯兵士として生きることになる人物である。



「ベルサイユのばら」の主人公オスカル(©池田理代子プロダクション)

この作品は少女漫画の枠組みを広げただけでなく、マンガ業界の内側にいた「大人」男性たちに対し、「少女読者でも面白い作品であれば、政治や社会を取り上げたものも楽しめる」ということを主張し、そのことを結果的に証明したのである。今よりも遙かに「女が学問をすること」が特別であった時代背景を踏まえると、それはまさに「革命」であったといえる。

次回も、同じくそれまでの少女漫画には稀だったSFという主題を取り扱った萩尾望都の作品について取り上げる。



『ベルサイユのばら』で描かれたマリー・アントワネット(©池田理代子プロダクション)

(日本出版 学芸理事・大 学講師) (金曜掲載)